

『最初の交響曲と最後の交響曲の間には（2）：アルテュール・オネゲル』

伊藤美由紀（1200文字）

スイス人両親をもちフランスの港町ル・アーブルに生まれ、人生の大半をパリで活躍をしたアルテュール・オネゲル。両親がチューリヒの旧家の出身で、チューリヒ音楽院では、ワーグナー、シュトラウス、レーガーらの音楽を学ぶ。ドイツ系スイス人というこだわりからスイス国籍で活動し、生涯を通してベートーヴェン、バッハ、ワーグナーらのドイツ系作曲家の影響を強く受けている。同時に生涯パリを拠点に作曲活動を行い、パリ音楽院の同窓生であるミヨーらと「フランス6人組」を結成したものの、反ロマン主義、反印象主義の主張には賛同せず、ドイツロマン派音楽、ドビュッシーからの影響を受けて作曲活動を続けた。また、バッハを生涯敬愛し研究を続け、対位法を駆使し、キリスト教の信仰に根ざし内省的で重厚な作品を書き続けた。これらの傾向は彼の交響曲作品にも顕著に見られる。

オネゲルの《交響曲第1番》は、彼の38歳のときの作品で、既に作曲家として経験を積み熟練した作曲家による第1番である。交響的断章（運動）1番《パシフィック 231》、2番《ラグビー》の作品で既に成功を収めていた。特に機関車の動く躍動感やスピード感を表現した《パシフィック 231》は、彼の代表作の一つとなっている。その後、オネゲルは、交響曲作品を5曲書いている。全てに共通する特徴は、卓越した構築性、ポリフォニックな構造、重厚で暗く重々しい色彩の管弦楽法、強烈なりズムである。また、フランク以降のフランス交響曲の伝統である3楽章形式（急-緩-急）、副題付きが多い。

《交響曲第1番》は、ボストン交響楽団の創立50周年記念としてセルゲイ・クーセヴィツキーの依頼により作曲され、彼により初演された。他に依頼された作曲家は、ルーセル、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ヒンデミットという錚々たる顔ぶれである。先行する《パシフィック 231》を彷彿させる爽快さとともに、不協和音の使用による攻撃的なスピード感、管楽器の叫びは、後の作品にも現れる彼の特徴である。またストラヴィンスキーの原始主義作風の影響も感じられる。その後、第2次世界大戦が始まりオネゲルは絶望感に苛まれ第2番を書き上げるのに5年を費やす。その為、編成も小さく弦楽合奏とトランペットの為の第2番は陰鬱な曲調である。旧バーゼル室内管弦楽団創立10周年記念の為に設立者のパウル・ザッハーの委嘱でスイスのバーゼルで初演さ

れた。同じく第4番《バーゼルの喜び》も同団体の委嘱で書いている。第3番《典礼風》もチューリヒで初演されておりスイスとの繋がり深い。特に3番は宗教的な内面性を追求し、20世紀を代表する交響曲の一つとして演奏される機会も多い。

全3楽章共にレの音で終わることから《3つのレ》と名付けられている最後の《交響曲第5番》は、クーセヴィツキー財団の委嘱、ボストン交響楽団により初演された。第4番後、心筋梗塞で倒れ創作意欲も衰えていたと言われるものの、焦燥感、絶望感が音楽として結実された力作となる。2楽章では、「ある種の12音技法を試みた」と、作曲者自身が語るように新たな挑戦もしている。

オネゲルは、スイスとフランスの影響を受けながら、ルーセルとともにフランス屈指の交響曲作曲家として近代フランス音楽の発展に貢献した。